

帝国主義による断層線:ベネズエラ地震

クリス・ギルバート、シラ・パスクアル・マルキナ

マスリー・レビュー 2026 年 6 月 29 日

[Imperialism-Induced Fault Lines: The Venezuelan Earthquake - MR Online](#)

純粋な自然災害というものは存在しません。特に包囲された国ではなおさらです。同様に、災害への対応は常に社会的、政治的、さらには地政学的要因に媒介されます。独立闘争中に起きた 1812 年の壊滅的な地震の後、シモン・ボリバルはこう述べました。「もし自然が私たちに反対するなら、私たちはそれと戦い、自然を従わせよう」。今日では、この発言は奇妙な反生態学的な爆発のように聞こえるかもしれませんが、ボリバルが言いたかったのは、解放という戦略的プロジェクトが最前線に立ち、自然の課題に直面しても私たちの行動を導くべきだということです。

これは、最近ベネズエラを襲った地震を考える際に考えるべきことです。自然の事実は単純で、地面は二度連続して動き、最初はマグニチュード 7.2、数秒後に 7.5 の振動が続いたのです。その後遺跡として、破壊はラ・グアイラ沿岸を走るサン・セバスティアン断層のような自然の断層線に沿って広がりましたが、それは帝国主義が作った断層線にも広がりました。その中でも特に、10 年以上にわたる（米国による）厳しい制裁によって生じたインフラ、緊急救助能力、医療システムの亀裂が挙げられます。

これらの制裁は依然として 1000 件を超えており、単なる言葉や敵対的な意図ではありません。ワシントンの CEPR 研究所のマーク・ワイズプロット氏の研究によれば、わずか 1 年で約 4 万人の超過死亡（予測値を上回る実際の死者数）の原因になったと推定されています。国際金融システムに馴染みのない人にとっては、この種の制裁体制の影響を理解するのは難しいかもしれません。しかし、その制裁の結果、すべての国際取引が困難になります。通常の貿易や

信用枠は崩壊し、企業、銀行、政府は、合法的取引であっても、保証がなかったり将来の報復を恐れて取引を避けるのです。

その結果は災害への準備と対応のあらゆる側面に影響を及ぼします。ベネズエラでは、2015年にオバマ大統領令が発表された直後、医師、医療従事者、土木技師、その他の訓練を受けた専門家を含む何百万人もの人々が移住を始めました。重量の重い救助装備は、予備部品が輸入できなくなったため修理が難しくなりました。病院は専門医療機器の補充に苦労しました。公共事業は資金調達が枯渇し、供給業者が二次制裁を恐れているため、メンテナンスを延期しました。取引そのものは法律上許されていても、銀行やメーカーは制裁を過度に恐れて取引を避けてしまいます。その結果、必要な物資やサービスが常に不足し、現場の機関は“慢性的な欠乏状態”の中で、自力でやりくりせざるをえなくなるのです。

2つ目の断層線は、1月3日のベネズエラに対する帝国主義の攻撃によって開かれました。民主的に選出されたニコラス・マドゥロ大統領が軍事作戦で拉致され、100人以上が死亡し、多くの人を負傷し心的外傷を負いました。ボリバル革命は政治権力を維持することに成功し、これは革命過程に不可欠なものでしたが、ベネズエラは石油販売の支配権を失い、特に石油を中心とした天然資源を規制する高度な立法に「改革」を導入せざるを得ませんでした。

これらすべてを踏まえると、今回のベネズエラ地震は、その破壊力や長期的な影響が、本来の自然災害としての規模以上に「致命的なもの」になってしまいました。その直接の原因は、米国による多層的で継続的な対ベネズエラ攻撃（制裁・金融封鎖・政治介入など）に起因する要因が重なったためといえます。現在、公式に約1500人の死亡者が記録されており、その悲劇的な死者数は今後も増加し続けるでしょう。地震による犠牲者の総数は、さまざまな形で社会に深い影響を与えます。そして、その被害を減らすために、主権を保ちながら協調的に対応しようとする取り組みそのものが、いまや“戦場”になっています。なぜなら、その対応の過程の中心には、米国の帝国主義との根本的な対立があるからです。



食料、衣料、医薬品、その他の必需品の収集活動がベネズエラ全土で発生しています。ここでは、トルヒーリョ・コムーニ州のメンバーが地震で避難を余儀なくされた家族への寄付を組織しています。(トルヒーリョ県)

根本的に異なる反応

二重地震が発生した際、雷鳴のような音、長く激しい地面の動き、そして奇妙な色の空が不気味に組み合わせられたものとして体験されました。ある観察者はそれを「風のない風」と表現しました。人々は叫び、犬たちは恐怖で狂いました。建物全体が瓦礫と化し、多くの人々が国民の祝日を過ごしたビーチにはひび割れができました。数日後も人々は瓦礫の下に閉じ込められたままです。特にラ・グアイラ沿岸の都市や町では状況が深刻です。ソーシャルネットワーク上では、家族が必死に行方不明の愛する人を探しながら、何百枚もの写真や名前が拡散しています。

このような状況では、まず自分の利益を考えずに援助を提供するのは自然なことです。まさにベネズエラや隣接国々の人々が行っていることです。デルシー・ロドリゲス暫定政権も迅速かつ確固として対応し、過去 30 年間のボリバ

ル革命を特徴づけてきた人民中心の手段を用いています。政府のこの対応と並行して、大量の自発的な支援も行われました。大量に積み上げられた物資をオートバイが被災地域へと運び、ボランティアも州政府主導の大規模な救助活動に参加し、メキシコ、キューバ、ブラジルからの支援チームも迅速に具体的な支援を携えて到着しました。

ベネズエラ政府やラテンアメリカの人々の対応が思いやりを駆り立てている一方、人類への関心が利益、収奪、支配の動機に取って代われ、しばしば他者の不幸を自らの利益に変えようとするアメリカ帝国主義には同じことは言えません。地震の翌日、マルコ・ルビオ国務長官は冷静に、陸軍省、米南方軍司令部（SOUTHCOM）、そして海兵隊が米国の「援助」活動の中心となると発表しました。

この手法は以前にも見られました。2010年のハイチの壊滅的な地震の後、アメリカの「人道支援」というほとんど隠しきれないトロイの木馬が、航空母艦と約2万人の地上部隊という形で到来しました。ハイチの場合、その事実上の占領の結果としては、明らかな主権喪失、性的暴行や搾取の事例が記録され、そして占領軍によるコレラの流行が occurred しました。

帝国主義の計画に直面して、ベネズエラ革命の民衆の声は三つの要求で団結しています。すなわち、アメリカは制裁を完全に解除し、凍結しているベネズエラの資産をすべて開放し、マドゥロ大統領とシリア・フローレスをベネズエラに返還することです。これらの措置が取られなければ、米国の駐留は単なる軍事占領のように見えます。これはドナルド・トランプのMAGA帝国主義が表現した再植民地化の野望の不可欠な一部であり、モンロー主義の醜悪な復活となるのです。

物語をめぐる戦い

ベネズエラの人々、その未来、そして彼らのプロジェクトを一体的に守る闘いは、メディアやソーシャルネットワークでも闘われています。政府が対応していない、あるいは救済を妨げているという虚偽で悪意ある主張が広まっています。同時に、トルコの地震を含む無関係な災害の映像が、ベネズエラの映像として流され、AIの大量の雑音も見せかけられています。この多くは、1月3日

以降の（政治）取引から取り残されているマリア・コリーナ・マチャドなど不満を抱く野党によっておこなわれています。



カラカスでは、人々が自宅の評価を待つ間、シェルターに行ったり路上でキャンプをしたりしています。（アンドリュー・ドラム）

善意のドライバーが大量にラ・グアイラに向かおうとしたため、カラカスからの主要高速道路が渋滞し、一時的に重機や救急車の到着が妨げられましたのは事実です。同様に、多くの人々、車、オートバイが救助現場の周囲に集まり、瓦礫の下に閉じ込められた人々の声は聞き取りにくく、救助活動を妨げました。国内外の救助隊には作業スペースが必要でした。政府はこれに対し、ポリエドロ・デ・カラカスというスポーツ複合施設に調整センターを設置し、民間支援物資を集めてトラックで必要な場所へ送り届けました。センターでは、ボランティアに参加した人々が感謝され、どこで最も役に立てるかが判断されます。

COVID パンデミックが教えてくれたのは、国家主導の対応だけが効果的だということです。非政府組織や個人も歓迎されますが、それは主権国家だけが主導できる協調的な取り組みの一部である必要があります。現在外国メディアが五、広く流されている大嘘は、基本的にボリバル革命に対して常に用いられてきたものと同じです。すなわち、グローバル・ノースの政府が行使するものと

同等かそれよりもおそらく弱いレベルの国家権力は、グローバル・サウスの国で行使される際には「権威主義的とされるというものです。一方で、政府の対応がないため、強制的な外部介入の道が開かれていると主張する声もあります。

革命的準備

今回の連続地震は制裁で弱体化した国を襲いましたが、一方では 27 年間にわたるボリバル革命によって強化されました。この革命はベネズエラ社会のあらゆる側面に深く影響を与えてきました。制裁が体系的にベネズエラの物質的インフラを弱体化させてきたとすれば、ボリバル革命は 20 年以上にわたり新たな社会的代謝機能を育んできました。まだ形成段階にありますが、すでに国の最大の回復力の源となっています。コムーナ評議会、コムーナ、市民・軍事連合、公営住宅プログラムなどが、危機には集団で対応するための国の能力の一部となりました。

この革命は一貫して国内の住宅ストックを強化してきました。2011 年にウゴ・チャベスが始めた住宅プロジェクト「グラン・ミシオン・ビビエンダ・ベネズエラ」は、全国で数百万戸の「尊厳ある住宅」を建設してきました。これらの建物の多くは、中国、ブラジル、ベラルーシ、ベネズエラの各企業によって建てられ、地震でも良好な状態を維持しています。建物が住めない状態になった場合(主に沿岸断層線沿いで)、崩壊せずに傾く傾向がありました。そこで人々を不安定な丘陵地帯に分散させるのではなく、アパートに集中させることも安全です。ここで建設基準が高いだけでなく、集団行動や国家支援の提供をしやすいするためです。

第二の要因はチャベスが推進した文民・軍の同盟です。このモデルは現在、国民全体に内面化され、政府とボランティアの連携対応の枠組みとなりました。マドゥロ大統領が賢明にすすめた警察を含めた文民・軍の同盟は、常に 600 万人規模の民兵となる制度的な取り決めです。同時に、民間人と軍人の階級意識に根ざしたより広範な政治体制でもありました。この「市民と軍の協力体制（民軍同盟）」が初めて本格的に試されたのは、1999 年のバルガス大災害でした。そして今回の地震がより強く襲ったまさにその地域で、当時と同じように、この民軍同盟は再び力を発揮しています。

最後に、最も先見の明のある対応が形になっているのは、国内の社会主義コムーナです。ユニオン・コムネラというネットワークのチームがラ・グアイラ地域の救助活動に向かいました。カラカスのエル・パナル・コムーナでは、バリオの建物の状態を評価するだけでなく、住民が複数の収集センターを設置し、地震で家を失った人々のための避難所を整備しています。

2010年代半ばの食糧不足の際に直面した課題と同様に、全国の人々は医療や生存に関わる問題を共同で解決し、前進の道を模索するためにコムーナに頼っています。国のコムーナ運動の力と堅固なイデオロギー形成を考えれば、コムーナは再び新たな政治意識の触媒となる可能性があります。こうした厳しい状況の中で、民軍同盟の力は、1月3日の攻撃によって一時的に影を落とされた社会主義プロジェクトのもとに、国民を再び結集させるうえで決定的な役割を果たすかもしれません。

長年の封鎖と帝国主義的侵略により、ベネズエラは物質的に弱体化したことは間違いありません。しかし、ボリバル革命は簡単には取り消せない新たな社会的代謝を生み出しました。すなわち、危機に対応できる組織化された人々と制度のセットです。地震が国の脆弱性を露呈させたと同時に、その真の強みがどこにあるのかも明らかにしました。それは革命的な人々と深く根付いた社会的・制度的変革にあります。

【翻訳チェック 田中靖宏】



ラ・グアイラのウニオン・コムネラ旅団(Brigada Argentina Permanente)

筆者のクリス・ギルバートは、ベネズエラ・ボリバリアナ大学の政治学教授。『マンスリー・レビュー』の寄稿編集者、そして『コミューン・オア・ナッシング!』の著者です。『ベネズエラの共同体運動とその社会主義プロジェクト』(マンスリー・レビュー・プレス)など、多数の書籍や記事があります。シラ・パスクアル・マルキナと共に、マルクス主義教育プログラム兼ポッドキャスト『Escuela de Cuadros』の創設者兼共同ホストを務めています。

シラ・パスクアル・マルキナは、エル・パナル・コミューンの教育イニシアチブであるプルリヴァシダッド・パトリア・グランデで人気のある教育者です。また、国際共同民主主義ネットワークのメンバーでもあります。クリス・ギルバートと共著で、『ベネズエラ、闘争としての現在:ボリバル革命からの声』(Monthly Review Press)、書籍シリーズ『Resistencia comunal frente al bloqueo imperialista』(ベネソラノ・アンチプロケオ監視台)、『Protagonistas: construcción comunal en tiempos de bloqueo imperialista』(Observatorio および PT)の共著者。また、『エスクエラ・デ・クアドロスの』創設者でありホストでもあります。

【翻訳チェック 田中靖宏】